

平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会報告（素案）

区分	内容	ページ
第 1 章	1 審議テーマの設定について	1
	2 本報告書の目的・対象者	
	3 協議の経過と報告書の構成（省略）	
第 2 章	<u>若者と地域の現状と背景</u> 1 若者の「チカラ」について	3
	2 大人と若者の関係について	
	3 若者の参画について	
	4 地域の状況について	
第 3 章	<u>若者による地域づくりを進める上で重要な視点</u> 1 若者と大人がつながる場	6
	2 若者の経験を大切にする	
	3 若者に伴走する	
第 4 章	<u>実践検証事業の実施</u> 1 実施概要	10
	2 検証結果	
第 5 章	<u>今後に向けて</u> 1 若者による地域づくりのポイント	13
	2 今後の取組の方向性	
参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 審議テーマに関する説明図表 ・ ケーススタディ（企画調整部会委員意見発表） ・ 実践検証事業報告書 ・ 審議経過、委員名簿 	省略

第 1 章 審議テーマ

1 審議テーマの設定について

(1) 今期審議テーマ

「若者による地域づくりのカタチ」～若者の「チカラ」を地域の「チカラ」に～

平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会においては、平成 28 年 3 月に改定した「かながわ青少年育成・支援指針」を踏まえ、青少年の成長と自立を支援する新たな施策を展開する上で、当事者である若者が主体となって大人とパートナーシップを組みながら地域づくりを進めることが重要であるとの視点に立ち、調査審議を行うこととした。

また、本テーマにおける「地域」とは、子ども・若者の育ちに必要な家庭や学校以外の「場」を指す。若者が地域とのつながりの中から活躍する場を見つけ、多様な交流を図ることで、地域の活性化と若者の「自立・参加・共生」が実現する地域づくりのカタチを審議する。

(2) 審議テーマの背景

現代の青少年を取り巻く現状として、子どもが若者になり、大人になる育ちのサイクルの崩れ、少子化・核家族化の進行による家庭での子育ての孤立化や地域での人間関係の希薄化により地域における青少年を育む力が低下している。

一方で、子ども食堂や学習支援を通じた居場所づくりなど若者を支援する場を模索する動きがある。

① 青少年の「成長と自立」のプロセスの変化

- ・若い世代ほど完全失業率は高く、長期失業者の割合も増加傾向にある。
- ・大学卒業者のうち、5 人に 1 人は就職も進学もしていない。
- ・35 歳未満の男性の 4 人に 1 人、女性の 2 人に 1 人が非正規雇用であり、若い世代の非正規雇用者の割合は増加傾向にある。
- ・ひきこもり等困難を有する青少年の問題の深刻化

② 家庭や地域における青少年を育む力の低下

- ・県内の青少年人口の推移：総人口に占める青少年人口の割合は 28.3%
- ・県内の核家族の状況：1 世帯あたり人員 2.33 人
- ・今住んでいる地域の行事への参加（県内）：小学生約 6 割、中学生約 4 割
- ・日常生活での接触相手（全国 15～29 歳）：1 位「家族」69.5%、2 位「高校・大学の友人」51.8%、3 位「地元の友人」39.5%、4 位「その他の友人」21.6%、

5位「恋人」18%、6位「ネット上の仲間」10%

・居場所ごとの満足度（全国15～29歳）：居心地の良い場所

1位「自分の部屋」89%、2位「家庭」79.9%、3位「ネット空間」62.1%

4位「地域」58.5%、5位「学校」49.2%、6位39.2%「職場」

2 本報告書の目的・対象

- 本報告書の目的は、若者の「自立・参加・共生」を実現するために、若者が主体となって大人とパートナーシップを組みながら地域づくりを進めるという視点から考え、若者が安心して地域とつながり、活躍するために、若者による地域づくりをサポートするものできる大人との関係や地域のあり方などをまとめることである。
- また、本報告書は、若者（主に思春期及び青年期の10代から20代）、地域とのつながりを重視する観点から多様な世代の方及び地域活動実践者を対象として、本報告書の内容を県民に広く発信する。

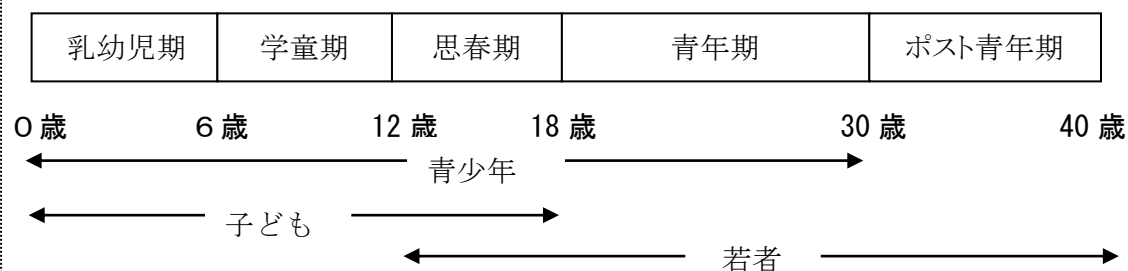
<若者について>

○ 現代のライフスタイルでは、小、中学生は子ども会などを通じて地域と関わる機会があるが、高校生、大学生、社会人となった主に思春期及び青年期の10代から20代は地域と関わる機会が減る。30代は家庭を持ち始める人が増え、子どもで地域とつながるなど地域と関わる機会がある年代である。

○ 地域をつくるという社会参加に関しては、自分で役割を選択する、自分でつくることが基本となる。10代、20代は社会的役割が固定化されていないため、社会参加に関し、自由な選択ができる。30代は家庭を持つ、会社で役職につくなど社会的役割が固定化され、社会参加に関して自由に選択することが狭まってくる。

○ 本報告書のメインターゲットは、若者の年代を地域と関わる機会が少なく、社会的役割が固定化されていない思春期及び青年期の10代から20代とし、30代については、再び地域と関わる年代であることから地域づくりに参加されることが期待される。

【参考：「かながわ青少年育成・支援指針」における青少年等の考え方】



第2章 若者と地域の現状と背景

第1章で設定した審議テーマを検討する上で、若者や若者と大人・地域との関係などの現状について4つの論点から整理する。

1 若者の「チカラ」について

- 若者の能力は、学校教育や企業に就職する際など、大人や社会が必要と考える能力を身につけることが期待されている。大人が、若者が社会で通用する人材になるための様々な能力を分析、抽出し、一般化して「知識や情報を活用する能力」や「コミュニケーション能力」などに細分化し、そうした能力を若者に身につけるよう求め、それらを個人の能力として測定し、評価してきた。
- 一方で、人は生活や人とのやり取りの中から自ずと身につける力がある。例えば、「普段はおとなしい若者が小さな子どもと接するときに大きな力を発揮する」、「いつも物静かな若者が人の話を聴く力に長けている」といったものは、生活の中で発揮されるものである。
- 生活の中で誰と一緒に、誰とともに何をするかということがとても大事である。他者との関係の中での偶発的なアクシデントなど、様々な場面に対応していくことが生きる力となる。
- 審議テーマの副題「若者のチカラを地域のチカラに」にある「チカラ」は、大人や社会が、若者が身につけるべき力として抽出し、一般化された力・能力に対し、生活する中で自然と身につけ、具体的な状況や関係性の中で発揮される「チカラ」と捉える必要があるのではないか。こうした「チカラ」は、若者の存在自体が大人や社会に与える「影響力」と表現でき、若者による地域づくりを考える上で大切にしていけるべきではないか。

2 大人と若者の関係について

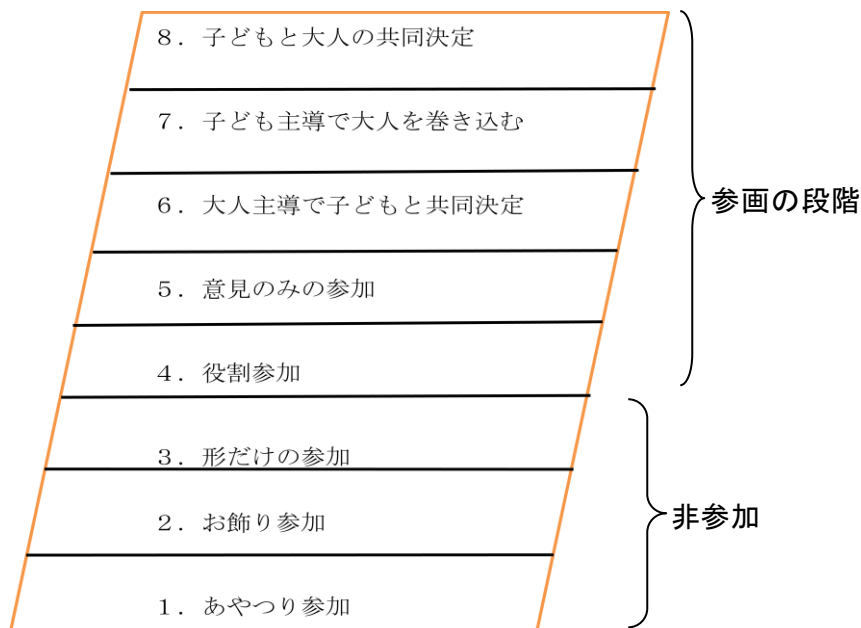
- 今、若者が出会う大人は、親か学校や塾の先生くらいで、かつてに比べ、若者が多様な年代の大人に出会うことが少なくなっている。世代間の関わりが分断され縮小される中、大人と若者の信頼の絆は育まれにくくなっている。
- 若者が、弱さを出せない、弱さを共有できないことが、大人と若者との信頼と寛容の関係をつくる上で障壁となっているのではないか。何度も失敗や挫折を繰り返して深く傷ついて生きてきた若者の経験を共有してくれる、じっと話を聴いてくれる誰かが必要なのではないか。

- 世代間の関係が希薄になっている中で、地域づくりを考える場合、もう一度多世代が安心して出会い直す、関係を結び直すことが必要ではないか。大人と若者がお互いを受け止め合い、対話し、パートナーとなることができる場が必要ではないか。

3 若者の参画について

- 大人と若者の関係性については、高度経済成長期頃まではその時代背景と連動しながら、「青少年育成」、「青少年指導」という言葉で、大人が子どもや若者の成長発達に向けて育成指導するという考え方であった。
- 1980年代に入り経済が低成長の時代に入って以降、子ども会など伝統的な青少年団体の会員数が減少し続けている。これは、少子化による影響のみではなく、低成長により、頑張れば明日はもっと良くなるという生活実感がない中で、大人の育成指導により若者を成長させるという旧来の考え方が現実から乖離してきているとも考えられる。
- こうした中で、育成指導から若者を支援するという考え方「青少年活動支援（ユースワーク）」への転換が必要となっている。
- 若者と大人との関係性を見直す上では、社会参加における子どもと大人の関わり方を8段階で示した「参画のはしご」というフレームワークを手がかりとして考えることができる。これは、子どもの社会参画の段階を分かりやすく「はしご」にまとめたものだが、若者にもあてはめて考えることができる。大人と若者の関係性について段々上の方に行くパートナーシップを組んでいく対等な関係性になっていくことを示している。きっかけとして「1 あやつり参加」や「2 お飾り参加」があっても良く、ひとつの実践でも「1 あやつり参加」から「8 子どもと大人の共同決定」まで行ったり来たりすることもあり、一概に「8」がすべて良いわけではないことには留意する必要がある。
- 「4 役割参加」は大人が若者に役割を与え、役割の意味を伝える。「5 意見参加」は大人が主導し、若者は意見だけを言う参加となり、「6 大人主導で子どもと共同決定」は大人が主導だが、若者と一緒に意思決定をする段階となる。「7 子ども主導で大人を巻き込む」では、若者が発案し大人を巻き込む、「8」は若者と大人がパートナーシップを組み、対等な関係性になる段階である。参画の経験がない若者を後押しし、大人が計画づくりのきっかけをつくることは必要であり、大人は若者の意思を尊重し、まかせることも大切である。

<参画のはしご>



子どもの参画のはしご図
ロジャーハート
『子どもの参画』
萌文社、2000年より作成

4 地域の状況について

- 町内会、自治会、青年団などは、地域を支える重要な役割を果たしてきた。一方で、都市化した地域では青年団の活動が活発ではなく、青年団がない地域も多く見受けられるようになった。
- こうした現状のもと、地域を面的なイメージで捉え、町内会などの伝統的な地域の組織が、網羅的、組織的に地域を動かすというのは難しくなっている。また、町内会などの既存の組織に若者世代が入っていきにくいと感じている。
- 今後は、町内会など伝統的な地域の組織を含め、多世代に開かれた小さなコミュニティがお互いに緩やかにつながり合いながら、多層的にネットワークを組むといった地域のイメージを持つ必要があるのではないか。

第3章 若者による地域づくりを進める上で重要な視点

第2章で4つの論点から整理した現状に対し、若者による地域づくりを進めるための視点をまとめる。

1 若者と大人がつながる場

(1) 人と人が出会う場所

- 地域の中に人と人が出会う場所が必要である。まちづくり、地域づくりでは「生きがい」、「つながり」、「活動」が必要である。他者との温かい関係、互いに尊重し合える関係があるから生きている実感、生きがいを得られる。人との関係が十分にできると生きる意欲が湧き、新しいことを始めたいと思う。それが地域の様々な「自発的な活動」につながっていく。生きる喜び、活動の意欲につながるような出会い方ができる場所がまだ社会に少ない。
- 町内会などフォーマルで組織的な地域も基盤として大切であるが、今後はインフォーマルな「共」の生活、インフォーマルな人のネットワーク、人のつながりを大切にしていく視点が必要である。

昔は一人ひとりが、見守りや子育てといった家の外のことをしていたが、現在では家の中だけで、家の外のことをやる機会が少なくなり、近所付き合いの難しさなども生じている。
- 子どもから大人まで様々な年代の人が、いつ来ても帰ってもよく、それぞれが、居たいように過ごすことができる空間の中で、1回や2回はお互いに接触できる機会があるといった関係によってその人の居場所となる。
- 若者がやりたいと思っていることを実践している大人に直接出会い、話を聴く場やチャレンジできる場が必要である。大学生の就職活動は、1年程度でイベント的に決めるのではなく、いろいろな人に出会い、やりたいことをやっている人に直接話を聴く場が必要である。

(2) 大人が若者の話を聴く

- 社会から認められていない、求められていない、失敗は許されないといった思いを持つ若者が、他の人に「ダメはダメ」でよいと現状のままの自分を受け止めてもらえることが大切である。

- 挫折や絶望等からつまずき、マイナス感情を持つ若者には、いつも周囲から「頑張れ」と前向きなアドバイスしかもらえず、プラスの感情に変えるよう叱咤激励されながら引きこもってしまうといったことがある。若者が一時的に逃げる場所や時間が必要で、失敗も含めて若者のありのままの自分を認める大人が必要である。
- 若者には、周りから自分の存在を大切にされる経験が重要で、単純に話を聞いてもらうだけで若者にとってはエンパワメントになる。
- 若者を中心に Twitter、Facebook、LINE やメールといった様々なメディアを駆使して、様々な場所から互いに情報発信し合い、他者から様々な評価されるようになっていく。顔と顔の見える関係がなく、丸ごとの関わりがない中で自分の想像だけで相手の言葉を解釈することになり、相手はそのようなつもりがなくても、自分が落ち込んでいるときに読むと非常に傷つく言葉として受け止めることがある。こうした傷つきを信頼できる大人に話し、傷つきの捉え方の構えのようなものを身につけていくことが大切である。
- 今の地域には、若者の空間的な居場所や精神的な居場所がなく、つながりが希薄になり、自分が必要とされていない感覚がある中で、何をしても、何もしなくても、自分という存在を認めてもらえる居場所が必要である。

(3) 若者と大人の対話

- 近代の思考は目的志向で、「目的を決めてそこにいかに効率的に向かっていくか」という意識が強かったが、目的志向だけではなく、対話的に転換していきうということが起こってきている。いかに、世代を超えた者どうしの対話をしていくか、その対話の場所を取り持つ人を誰がやるのかというところがキーとなる。実の親や兄弟姉妹でもない「斜めの関係」でいられるような第三の誰かが間を取り持つポジションとなってくることが考えられる。
- 例えば、大家族では祖父母をはじめとして多世代のいろいろな物の見方が存在しており、一元的にこれが正しいといった規則性やルールが成立しえない場である。物の見方が多元化する、復元化することは大切なことである。様々な年代の人が混ざり、対話できる、評価や競争のない場が必要である。

2 若者の経験を大切にす

(1) 若者がクリエイトする

- 「何も教えてもらわなかったから」、「マニュアルがなかったから」と学校や仕事を辞める若者がいる。自分たちで「何かをつくり出す」、「クリエイトする」ということが大切で、いろいろな成長過程を育むことが大切である。
- 「遊び」という誰にも平等にあるべき体験をパッケージ化し、人数を限定してお金をとるといった親の理解やお金がないと参加できない仕組みを変えなければならない。経済的にあまり豊かではなく、経験値が低い子どもたちがクリエイティブな体験をして夢をかなえる、ワクワクすることが必要である。
- 農業など植物を育てることは、自分たちの都合では育ってくれない。どんなに気持ちやお金をかけても育つとは限らず、どんなに手をかけても台風などの天候で上手くいかないことがあり、人間の力を超える自然と折り合って生きてきた中で多くの知恵を育んできた。不確実性が高まる現代社会で、改めて人との信頼や寛容さ、寄り添うこと、人の弱さなど人間のありようを捉えなおし、若者と大人の関係性や育ちのありようを問い直すことが大切である。
- 本気で力を出してもらおう出番や機会があることが大事である。自分が働きかけたら地域が動いてくれる、地域を変えられるという成功体験や、動き出すと何か変わるんだという手ごたえをいかに一人ひとりが持つかということが大事である。

(2) 若者と大人がともに学ぶ、ともに場をつくる

- 例えば、子どものサッカーチームで、普段は頑張れと言っている大人が入ると子どもが、自分よりできない大人に頑張ると言えることがある。大人が自分でもできないことを自覚して、子どもたちと一緒にできるようになるということは、対等な関係性、パートナーシップをつくることになる。
- 価値意識が違う世代が連携・協働・コラボしていく観点が必要である。現状では大人世代が若者世代に価値観を押し付けることが多い。大人側が世代間の違いを理解する寛容さを持ち、各世代の価値観の違いをうまく共有する、相互理解をしていくことが必要である。

3 若者に伴走する

(1) 若者に寄り添う

- 多くの大人が、若者をゴールまで引っ張り、同じ経験の若者たちを生み出すという旧来の大人の役割感で子どもと関わっている。大人が価値観を転換し、一緒に横にいる、少し斜め後ろにいるなどの役割をする大人が必要である。
- 若者が集まって自分たちがやりたいことをやり、一人ひとりが違う学びを得る。それでいいじゃないかと思えることができ、一緒に共感して見てくれる親や大人のネットワークがあるとよい。子どもが大切だから見守るだけでは不安という親の葛藤や感情を含めて、一緒に話せる場、みんなで見守るという体制や環境が大切である。

(2) 地域が若者を支える

- 若者による地域づくりを全国的な意味で言えば、地方部ではまだまだ青年団が元気に活動する地域がある。過疎化、高齢化が進んでいるが、地域おこしをしようと頑張る若者たちがいて、青年団の先輩たちのつながりから信頼され、地域から期待されている。一方で、都市化、高齢化が進む首都圏においては、伝統的な地域共同体が崩れてきているという現実があり、地域に何もつながりのない若者がどのように地域とつながりを持つのかという課題がある。自分のことを応援してくれる人がいる存在がある場所が大切で、地域の大人が若者を応援する姿を見せることが大切である。
- 地域がどう若者を引きこむかではなく、地域の大人が若者のチャレンジを支えることが大切である。若者が若者を応援する大人が存在に気づくと、若者が大人になったときに、同じように自分たちの地域で若者を支え、育てる人になっていくという循環が生まれる。

第4章 実践検証事業の実施～若者を中心とした多世代交流の場～

これまでの議論から、若者と地域の関わりを考える際には、若者と多世代の関わりが重要であることが示された。実践検証事業では「多世代ワークショップ」を実施し、若者を中心とした様々な世代の人が集い、語り合い、共感し合える場をつくる中で、若者が日頃、自分自身や他世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどを理解し、これまでの協議会の議論の検証を行った。

1 実施概要

(1) 開催日

平成29年8月20日（日）10時から17時

(2) 会場

湯河原リトリート ご縁の杜（湯河原町土肥）

(3) 参加者

ファシリテーター 合同会社CCC 由佐 美加子氏

若者世代（20代）14人

大人世代（30代～60代）20人

(4) 実施内容

① 実施目的

若者と多様な世代が集う「多世代ワークショップ」において、参加者が安心して語り合うことができる「場」をつくり、若者・大人の意識や実態を理解する。

② 実施内容

自己紹介～ペアワーク「二人で場をつくる。情熱と葛藤を語る、聴く」

～グループワーク

「各年代の大切にしたいこと、社会への願い、役割、恐れを語り合う」（年代別）

「各年代の考えをシェア（伝える、知る）」（多世代）

「多世代で、世代の多様性が分断（反発や抵抗）ではなく豊かなリソース（資源）として溶かしあうには何が必要か」（多世代）

～振り返り「今、あなたの胸に浮かぶ問いは何か」

③ ワークショップ事前準備

青少年問題協議会企画調整部会委員が、事前に多世代ワークショップのファシリテーター 由佐氏から、地域、家族や多世代交流といったコミュニケーションの場においては、「受容する（人に心を開く）、聴く（評価、判断をしない）、共感する」ことが大切であることなどについてお話を伺い、ワークショップに同席する機会を設けた。

2 検証結果

(今後の部会での議論をまとめ掲載します)

- 多世代といったときに年代と世代というのが、実は違うことで、それがすごく見えづら
いということが、いろんな年代、世代の人が一緒に地域を作ろうと思ったときの、バリア
になりうると感じました。

それが、世代間の違い、多世代というか、多文化共生じゃないかという話がありましたが、要は1990年代に生まれた人達と1950年代、60年代に生まれた人達の世界観や人生経験というのは全く異なる。これはすごく気づきにくいことで、同じ2017年に生きていて、同じ湯河原の場所に集まっていますが、その人たちが経験している、経験世界というのは実は全然違う。これは、結構シンプルで単純な現実ですが、多世代といったときに、どうしても先輩、後輩の中での議論になってしまうと、その辺の違いが一気に見えなくなってしまふ。改めて年上、年下ではなくて全然違う人間、全然違う文化背景を持っている人たちの交流
なのだという見方も、青少年問題を考えていく上では非常に大きな視点だと改めて感じました。(坂倉委員)

- 一つは、存在そのものを受け入れることの大切さを改めて思いました。黙って話を聞くことの難しさでもありますが、その人の意見に対して、常に自分なりの意味づけをしてしまいます。それは当然人間だから、そういうことはありうることでありますが、黙ってとりあえず話を聴いて、その人のメッセージというものを受けとめることの大切さと難しさを改めて思いました。

人を育てる営みというのは、こうしちゃだめ、こうやるといいよという意味づけをすることが大前提になっている。私も教育の一応研究者の端くれであるので、そういうふうにいるいろいろ考えてしまいますが、まず、そういうことをやる前に、その人の存在そのものといったらいいのでしょうか、それを受けとめる、受け入れるということがとても大事なことだと、改めて思いました。そういう意味では、坂倉先生がおっしゃった多文化共生と同じような意味があると思いました。

生涯教育の世界に「Learning to be」という、存在そのものを学ぶことが大事だという考え方があります。「Learning to have」いわゆる学校教育、職業教育もそうですが、「Have」することを学ぶ、知識やスキルを所有する、身に付けることを学びなさいという考え方ですが、そうではなく「Learning to be」、存在そのものを学ぶ。自分が存在している、或いは他人が存在していることを学ぶというものです。特に後者、人様が存在していることを学ぶことがとても大事だという考え方がありますが、そのことの何と云うか、その一面というのでしょうか。それを今回のワークショップで、具体的にはこういうこと
なのだと改めて感じさせてもらいました。

もう一つは、人が繋がる時には何か共有するものが必要だと思います。遊びでも、祭りでも何でも課題でもそうですが、客観的に物理的な意味で一つ存在しているものであったとしても、そのものの意味づけというのは、多種多様な意味づけができる。例えば、地域のお祭りについてどう思っているかというのは、一つのお祭りで、伝統的に同じことを繰

り返して毎年やっている祭りであったとしても、本人がどういう意味づけをしているかによって変わってくる。

だから、価値意識そのものまで遡って、意味づけそのものを我々も共有するということまでいかないと、対話あるいは共同作業といった、それ一緒にしましょうという共同実践といかないのではないかと考えていて、そういう意味では、まず対話すること、意味づけを共有化することがとても大事だと今回の経験で学ばせてもらいました。（笹井会長）

- 年代と世代などで全然文化や背景が違うことは当たり前だとずっと思っていました。それに加えて、やはり、私たちの家族が大家族から核家族に変わったこと、その核家族も20年位前から、専業主婦というのでしょうか、その言葉があっているかどうか、主婦世帯と共働き世帯の逆転がその位の時から起きており、今は、共働き世帯が上向きになっている状況があります。そういった、今回一緒に参加したいろんな年代の中で、それぞれのいろんな生い立ちというところもまた一つ、こういった居場所を作るときに、とても大切な、大事なもので、それぞれが尊重していて、いい形にしていくにはどういうことがあるのかなど、まだちょっと疑問に思っているところがありますが、そういう気づきが自分の中で一つ起きました。

もう一つの気づきが、今回参加した若者は、私が普段なかなかお目にかからない、活動的でエネルギーがある若者でした。その若者たちが、兜を脱いで、鎧を取って冠もなく、ああいった場で、個の自分を話し出して、私も一緒にいろんな対話をした中で、参加した若者が言ったことと、エネルギーが全くない、引きこもり、不登校で社会になかなか出られずに、やっとの思いで私たちの支援にたどり着いた若者が、対話する中で少しずつ自己開示していくのですが、同じことを言っていることに気づきました。それは、「1人で事を進められないけれど、自分が先に進むときには、上からではなく、フラットな関係で、常に寄り添ってくれる人がいると自信が出ます」という、同じ言葉がワークショップの若者から出ました。

私は、ワークショップの散歩の時に20代の若者と話をしましたが、その若者が、一緒に話すことによって、「いつも僕は自己啓発本で一生懸命本を読んで学んでいたけど、今日はこの20分で、本を読んだような、そういうストーリーが気づいた。こうやって隣同士で散歩して、自然と語れることが大事なのですね」と言われました。実は、これは5年間引きこもっていた子と、対話をしているときに「僕、支援って、上からで嫌だなとずっと思っていたけど、ここの支援はちょっと朝お散歩に行って、3、4分話して自分の気持ちを聞いてくれるようなそういう心地良さがあるのです」と言われて、そういう心地よい状況を作る、状態を作ることが居場所というものは自然とできてくるものであって、もしかしたら持続可能なものになってくるのかなということが今回参加して、今、新たな気づきで、湧いて出てきているものです。（藁田委員）

第5章 今後に向けて（提言）

（今後の部会での議論をまとめ掲載します）

<参考：「中間時点でのとりまとめ～今後の論点～」を抜粋>

地域の文化をつくる

- リアルな「生活感」のようなものを、若い人たちの地域づくりの活動の中に、どのように取り込んでいったらよいのか。
- 若い人たちが地域の中で自由に活動していく、地域の文化を作っていく主体になるために、という観点が必要ではないか。その上で、他者と関係を作って、文化的な価値をいろんな人たちと作っていくようになるために、どういうふうな施策やサポートが必要かというアプローチが重要ではないか。
- すでに地域で活動をしている経験豊富な大人から、経験の浅い子どもや若者まで、みんなが平場で、芸術、文化、芸能、あるいはもっと生活文化に密着しているものなど、新しい文化的な価値をつくり出していくことで対等な関係性ができるし、そういう事業の成果から得るものは大きいのではないか。

地域のしかけやきっかけ

- 地域に何のつながりもない若者をどのようにして巻き込んでいくのかというのが、すごく問題なのではないか。
- 社会的理解が必要不可欠になる中で、そのために場所やきっかけを誰がどのように仕掛けていくべきなのか。若者が積極的な仕掛けを行うための場所がない中で、誰が提供するのか。
- 人と人とが温かく関わりあえる場所がこの社会には十分でない中で、若者がやりたいことを表現する時間や場所、余地を地域の側がどう用意するか
- 自治会長など地域の有力者であるキーパーソンとどう連携していくか
- 自分をさらけ出せる場所があるということは、本当に安心できる。大掛かりな施設ということではなくても、いろいろな場面が、地域の中であるとすごくいいのではないか。
- まちづくりなどで「アダプト・プログラム」を導入する、例えばこの自治会はこの若者たちのプログラムを育てる役回りをしますということ決めてみんなで応援することができると面白いのではないか。

- 子どもを育てるということに照らして地域の状態把握をするため、例えば「何か地域で子ども達が活躍できる祭りやイベントがありますか」などの質問項目に YES/NO で答え、もしかして子どもにとってよい環境ではない部分がある、地域として優れているかもしれない、というようなことを、アセスメントで検証できるという取組ができたら、すごく良いのではないだろうか。

委員の事例発表から

- 大人が子どもに一方的に支援するのではなく、みんながやりたいことを実現していくことを一緒に楽しむ、同じ世代同士でできることはやってみよう、「コミュニティユースワーカー」という制度を立上げ、子どもたちのニーズを伴走者として聞いたり、一緒に楽しんだりするようなことを仕掛けている事例は、参考となるのではないか。
- 同時に形成され広がり相互につながっていく現象を指して「野火的活動」という言葉がある。ちょっと先を行っている若者や大人たちが、自分のやっていることが参加している人にどう影響を与えるのかということを考える機会、若者や大人たちを教育する、意識付けするということが、若者たちに直接何かをするということより必要なのではないか。
- 「放置されていた屋上」「使われていない古民家」「食べきれない食べ物」「あいまいな立場の人」など、使われていないとか、捨てられているとか、名づけられない資源を自由に活かし、コーディネートして活躍の場面をつくることではないか。どうしたらみんなで楽しくできるかということを実際に考え、競争社会の中で不要だと思われるものを活用するとマジックが起きるのではないか。
- グランドワーク三島は、日本の地域づくり、まちづくりの活動の中で、最も成功している事例だと思う。若い人たちが地域づくりに関わるということの、ひとつの素材になるのではないか。
- 子どもたち一人ひとりが地域や社会のことを知って愛着を持ち、主体的に何か自分のテーマとか、探求するというか、自分オリジナルの着眼点を養ったり、問題意識を養ったりする機会があるといいのではないか。それは「学ぶ意欲」というところにも絡んでくるのではないか。
- 起業的なプロジェクト、ビジネスとして継続させていくことが論点として重要